# 明治修身教科書における子どもの〈労働〉倫理
## —二宮金次郎と塩原多助—

坂本　麻裕子

キーワード　*労働　子ども　修身教科書　二宮金次郎　塩原多助*

## はじめに

明治 20 年代から 30 年代は近代日本の学校制度の確立期で、特に小学校教育の必要性を国民に認識させることは明治政府にとって重要な課題であった。こうした時代的背景から、当時の〈学校〉＝国民教育の場で使用する教科書に盛り込む素材をめぐって様々なイデオロギー的立場が存在した。

海後宗臣も指摘するように、この時期伝記テキストが増加傾向にあった。[1]中でも登場回数の多かった「二宮金次郎」は明治 37 年以降の国定修身教科書で伝記テキストの基軸ともなり、勉強しながら〈労働する子ども〉のイメージを強力に植え付けた。明治 20 年代頃、二宮と同じように〈労働する子ども〉のイメージが強調された「塩原多助」が修身教科書に登場し始める。これは三遊亭円朝によって人気を博した講談伝記譚『鹽原多助一代記』が原作の伝記である。

では、この両者は〈労働する子ども〉として、全く同じ〈労働〉倫理[2]を表していたのだろうか。最終的に二宮は国定修身教科書に残り、塩原は国定教科書に採用されなかった。その原因は何か。本稿では、国定修身教科書に収斂する国定前の修身教科書で使用された二宮と塩原のテキストを資料に、両者が表現した子どもの〈労働〉を支える規範・道徳思想について比較分析を行う。

これは文芸作品が教科書に取り込まれる際の表現の変容及びテキストの再解釈に関する考察である。また、修身教科書に描かれた模範的な〈労働〉する子ども像の背景にある明治期の国家イデオロギーを明らかにすることを目的としている。

## 1．先行研究の検討

### 1-1. 教科書制度及び修身教科書における人物主義の隆盛

まず、近代日本の学校制度と教科書制度の変遷をみていく。明治 5 年「学制」が発布され、〈学校〉が日本全国に設けられることになる。明治 4 年の廃藩置県を経て統一的に国家行政を進めることができるようになった明治政府は、全国を 8 大学区に分け、学区単位で小学校を設ける計画を立てた。[3]しかし、まず国民に「学制」が目指した近代学校制度を理解させる必要があり、その上、校舎を建設する費用も大きな障害となった。こうした現実的な実状に合わせるため明治 12 年に「学制」は廃止され、新たに「教育令」が公布された。これは「学制」の基本であった学区を廃止して町村単位に変更し、主な権限を地方に委ねる内容であった。その結果、「学制」実施後の統制が崩れ混乱をきたす地方も現れ批判が出たため、明治 13 年「改正教育令」を公布し、学校の設立や就学義務を厳しく規定した。

近代〈学校〉制度の普及と連動して、教科書制度も改変が繰り返されている。明治 13 年に文部省は小学校教科書の調査を開始し、明治 14 年に開申制度（届出制）、明治 16 年には小学校の教科書に関して認可制度が実施され、明治 19 年から教科書の検定制度が開始される。明治 24 年、これまで教師の口述で授業を行っていた修身科においても教科書を使用するよう通達が出される。その後、明治 36 年に国定教科書制度が成立し、明治 37 年の第 1 期から昭和 20 年の第 5 期まで国定教科書が続いた。このように、教科書に対する統制は徐々に強化されていく。これは教育を国家の管理下に置こうとする意図によるものである。つまり、〈学校〉における教育とは国民教育を指し、明治政府は近代国家体制を確立するために国民教育の整備を行い、それと同時に〈学校〉で使用する教科書への国家介入を強めていくのである。

次に、教科書に関して検討する。明治期の教科書は、時期や各種学校によって特徴がある。そこで、研究対象である小学校の教科書に焦点を定め、明治 20 年代及び明治 30 年代の修身教科書の特徴について史実と先行研究の知見をまとめたい。海後らによれば、明治 20 年代の修身教科書の特徴は「徳目主義」だと言う。[4]「徳目主義」とは、明治 23 年 10 月 30 日に発布された「教育ニ関スル勅語」を基本とし、勅語が示した徳目を繰り返す形式の教科書のことである。これに対して、明治 30 年代になると模範的人物を中心に編纂した「人物主義」の教科書が増加する。これは当時の教育思想の主流であったヘルバルト教育学の影響で、海後によれば「歴史上の模範人物の伝記を主として教材を排列（ママ）し、人物の伝記について連続的に学習を進める方針で、各課の内容を整え、児

童の興味を喚起しつゝ道徳教育の効果をあげようとした」[5]ものである。人物主義の教科書は、特に明治 33 年から 34 年に多数出版されたと言われている。つまり、国定教科書編纂直前の修身教科書に伝記テキストが使用され、その背景に西洋の教育学の影響があったことは、国定修身教科書で多用された伝記テキストを考える上で注目に値する事実である。

以上のように、当時の教科書の特徴や傾向に関しては先行研究で既に定説がある。しかし、個別の教科書テキストを一次資料とする分析や細かな比較は、まだ研究の余地がある。これは国定前の資料の多くが未整理である上に、膨大な量であることに起因している。そこで、本研究は国定前（明治初期～30 年代）の資料に注目し、先行研究の鳥瞰的視点を補うテキスト分析研究として考察を行う。また、国定以前の修身教科書における「イデオロギーとしての修身エートス」の分析はまだ不十分であり、この点に本テーマの独自性がある。

### 1-2. 国民教育の背景にあるエートス：〈立身出世〉と〈仁義忠孝〉

本節では当時の状況と〈学校〉制度の背後にあるエートスについて考察を行いたい。日本の状況について H. ノーマンは次のように述べている。

> 日本は経済上の自由放任（レッセ・フエール）の段階とそれに対応する政治的側面―ヴィクトリア朝風の自由主義とを省略して、一気に封建制度から資本主義へと飛躍した。このように、速度こそは近代日本の政治・社会形態を決定した要因である。日本は近代国家の樹立、…省略…工業的近代国家にふさわしい教育制度の形成を同時に成しとげねばならなかったが、その速度ゆえに、これらの重大な変革は民主主義的代議制を通じて人民大衆の手によってではなく、少数の専制官僚によって達成されたのである。この軍事的官僚は一般国民よりもはるかに進んでいたから、商人や農民などをはじめ不平の多い、しかもまだ十分に覚醒しない国民を背後にひきずってゆかなければならなかった。[6]
>
> （傍点は原文ママ。下線、筆者。）

つまり、日本の近代化は国民や経済的基盤が成熟して内発的に起こったのではなく、その特徴は「速度」にあった。それ故に、近代国家の樹立に向けて急速に法的整備が進められ、政府主導で〈学校〉制度即ち国民教育体制の確立が急がれたのである。一方で〈学校〉に通う児童の就学率[7]を上げることが困難だったのは、この「速度」に追いつけない国民や資本主義への急速な移行による経済的混乱と不況に原因があった。ノーマンが論じた下部構造及び制度の拡充と

いった近代的システム構築の「速度」はイデオロギー教育にも影響を与えたと考えられる。では、こうした状況下で進められた国民教育を牽引したエートスはいかなるものだったのか。

まず明治という時代の幕開けを支えた明治維新のエートスと明治政府の国民教育との関係について論じたい。海後宗臣は明治維新直後の国民教育の方針について、国民の指導者を育成する組織である大学（明治元年復興の京都の学習院と東京の昌平黌、明治 2 年復興の東京の大学校）[8]と各府県を通じて国民教化を行う小学校（明治 2 年 2 月 5 日の諸府県施政順序を定めた布告にある「小学校ヲ設クル事」）[9]に関する資料を分析し、「明治維新を転回せしめて来た皇道思想が幕末の国学者によって、維新直後、国民教化の中心傾向を決定するところのものとなった」が、「これらの（皇道思想的）教学の根本」は近代国家の形成に資する国民教育を実施する上で一貫して進むことが出来なかったと指摘した。[10]

小学校普及のため明治 5 年に出された「学制序文（被仰出書）」は、「学制」が示す新たな〈学校〉の意義を明らかにしている。そこには「人々自ら其身を立て其産を治め其業を昌にして以て其生を逐るゆゑんのものは他なし身を脩め智を開き才芸を長ずるによるなり而て其身を脩め知を開き才芸を長ずるは学にあらざれば能はず是れ学校の設あるゆゑん」と説明し、「学問は身を立るの財本ともいふべきもの」と明記されている。[11]更に、「華士族農工商及婦女子」を平等に「一般の人民」として扱い、身分や性差の別なく〈学校〉に行くよう指示している。つまり「学制」は、明治以前の儒教思想に基づく教育観や士農工商といった封建的身分制度と全く異なる立場をとり、近代欧米の実学主義思想に基づく教育観を受容した。しかし、明治 12 年の「教学聖旨」で伝統的な国風や儒教主義を基本とした皇国思想への方針転換が図られ、これに基づいて仁義忠孝を小学校教育で徹底して教育すべきことが明確にされて、初めて「修身」が全科目の先頭に置かれた。[12]

近代国家を目指す明治期日本が国民教育の場としての〈学校〉を最初に明確に規定した「学制序文（被仰出書）」のエートスは、実学主義と自力の経済活動による「一身独立」＝〈立身出世〉を説いた当時のベストセラー『学問のすゝめ』（福沢諭吉、明治 5〜9 年）[13]のエートスと共通している。[14]これに対して、明治 12 年の「教学聖旨」は「仁義忠孝」だけでなく「農商ノ子弟ニシテ其説ク所多クハ高尚ノ空論ノミ…省略…農商ニハ農商ノ學科ヲ設ケ高尚ニ馳セス實地ニ基ツキ…省略…本業ニ歸リテ…以下省略」[15]と述べ、農民と商人の子どもを本業から外れることなく労働させようとした。両者のズレは当時の明治政府の中に様々な立場と意見があったことを示している。更に両者の背景には対立するエートス、〈立身出世〉＝臣民の能動的学問の推奨と〈仁義忠孝〉＝

受動的な臣民の推奨がある。この〈仁義忠孝〉は神島が指摘する天皇を長とする「国家」を一つの「家」と見る「家族国家論」に則ったエートスと言える。[16]その後も〈立身出世〉と〈仁義忠孝〉は教科書の中で混在・並存していく。明治 23 年の教育勅語によって国民教育の大本が明確に示された後も、国定前の教科書にはこうした対立するエートスの混在・並存が多くみられるのである。

## 2．小学校修身教科書「二宮金次郎」

### 2-1.「二宮金次郎」に関する先行研究

国定前の教科書について具体的な考察を行う前に、まず比較の基軸である「二宮金次郎」について論じたい。明治 37 年から終戦に至るまでの国定教科書 5 期に登場する主要人物の調査によれば、国定修身教科書に登場する回数及び課数が一番多い人物は明治天皇で、次に二宮金次郎となっている。[17]また、戦後も二宮が教科書に採用され続けていたことを指摘した研究もある。[18]他方、国定修身教科書と国定国語教科書に採用された主要人物には若干の違いがあり、国定国語の 1 位は源義経、2 位は明治天皇で、二宮金次郎は上位 16 位以内に入っていない。つまり、二宮は修身教育イデオロギーにおいて特に意義ある人物と見なされており、理想的人物の伝記を利用した修身教育を通時的に分析する際、非常に有効な考察対象である。

修身教科書に採用された二宮金次郎のテキストに注目した先行研究[19]によれば、二宮尊徳が修身教科書に取り上げられるのは明治 23 年頃からで、検定制度や国定制度が導入されてから脚光を浴びた人物である。また、二宮はあらゆる教科書に登場し、人物主義の影響だけでは説明できないほど異常な数で採用されているという。[20]この背景には報徳社運動の隆興とそれを支持した明治政府の影響が認められ、「明治政府が二宮を尊重したのは、百姓一揆の方法をとらず、決して政治を口にせず、農民自身の勤勉と倹約によって、農村の矛盾を解決した」[21]からであるとも言われる。つまり二宮は「いずれの時代の施政者にとってもまことにつごうのよい人物」[22]だったのである。「二宮金次郎」の原典は、二宮尊徳の門人富田高慶が書き残した『尊徳記』とされ、明治 13 年に明治天皇も読んだという。明治 16 年には宮内省から全 8 冊刊行、全国の知事及び政府高官に配布された。明治 18 年には農商務省から出版、後に大日本農會からも出版されている。[23]

つまり、明治政府が二宮尊徳を取り上げるに至った背景には、当時、圧倒的多数を占めた農民を新政府の国民として取り込もうとした政治的思惑があった。

このような事情から、二宮尊徳の名前は明治政府主導で全国に浸透していったのである。これは富国強兵の柱として殖産興業や農業改革が進行する中で、『報徳記』を支持する人々が一定の勢力になっていたことを示している。二宮尊徳を修身教科書に採用し、明治天皇の次に多く登場させたのは、先行研究が指摘するように明治政府が二宮のイデオロギー的価値を知悉していたからだと考えられる。[24]

### 2-2. 二宮金次郎のイデオロギー的役割

以上のように、二宮尊徳は明治政府によって作られた、修身イデオロギーのモデルとしての模範的人物である。しかし、小学校修身教科書に登場する「二宮金次郎」は事実に即した二宮尊徳像によっては説明できない。なぜなら、『報徳記』の二宮は成人してからの二宮尊徳が中心であり、少年時代は特に重要視されていないからである。『報徳記』における幼少期や少年期の記述は必要最低限の数頁である。従って、小学校修身教科書に掲載された「二宮金次郎」のエピソードは『報徳記』とは異なる意図から脚色されたもので、多くの論者が指摘するように勤労に重点を置くところに特色がある。

明治以降の急速な「近代化」の過程で、農村は否応なしに貨幣経済の中に組み込まれていった。神島二郎は『近代日本の精神構造』の中で、その結果生じた農村の労働意欲の低下を防止するため「修身教育や社会教化において『勤倹力行』が鼓吹され、これに反する行為をきびしく非難してイデオロギー的なてこ入れが試みられた」[25]と分析している。「二宮金次郎」はこの「イデオロギー的なてこ入れ」装置として有効に機能したのである。[26]明治政府による二宮の教訓的利用の背景には、こうした「二宮金次郎」のイデオロギー的役割があった。

### 2-3. 二宮金次郎：〈労働〉する子ども像

修身教科書に掲載された子ども姿の二宮は、教科書検閲の強化路線をとった明治政府が推奨する〈子ども像〉であり、国民教育の場である〈学校〉で使用することを明確に意識して無私の勤労に励む子どもへと脚色された「二宮金次郎」像である。この意味で小学校修身教科書の二宮は単なる「勤勉と倹約を強調して農民の生き方を教える」[27]模範的人物ではなく、農村の〈労働する子ども〉の模範像なのである。そして、ここで言う〈子ども〉とは国民教育の対象者としての子どもであり、政府は国民の大多数が農民であった時代に、近代国家形成の基盤となる次世代の農民を国民として育成するという意図をもっていた。小学校修身教科書における二宮の特殊性はここにある。

## 3．小学校修身教科書「塩原多助」

### 3-1. 原典『鹽原多助一代記』

修身教科書の「塩原多助」の原典は、落語家の三遊亭圓朝（1839～1900）による『鹽原多助一代記』である。明治 9 年、圓朝は実在した炭商塩原太助について調査を開始し、明治 11 年に講談『鹽原多助一代記』を完成させた。明治 18 年には速記本[28]として出版され、興津要によれば当時としては「驚異的な十二萬部」[29]の売れ行きを示したという。明治 24 年には井上馨邸での園遊会で明治天皇の御前口演を行った。[30]

『鹽原多助一代記』は塩原多助の成功物語で、江戸時代を舞台に家、身分、義理人情、因縁が絡む複雑な構成をとる。江戸時代の封建社会の色彩が強い前近代的な話であり、話の背景に士農工商という身分制度と養子制度がある。武士の子どもであった多助が、父と同姓同名の農民の養子になるところから物語は始まる。この作品の中心テーマを、実父の角右衛門が如実に言い表している。

> 「恩義を弁（わきま）へて居るなれば町人でも士（さむらい）でも同じ事だから、今の主人善右衛門と申す者も命を助けて呉れた恩人。殊に主人であるから身を捨てゝ奉公をし、忠義に勤（まさつ）め上げ、手前が金子を拵へ國へ帰り、一旦絶へた親の家を相續し、親より勝（いや）て立派に家を建（やうう）てろョ。身を立て道を行ひ、名を後世に揚（あら）げて父母を顕はす位の事は、八歳のをり寐物語に度々申聞けてあるではないか。」[31]
>
> （下線、筆者。）

即ち『鹽原多助一代記』のテーマは、養父の家の再興と立身出世である。浪人から武士に戻るための金子を用立ててくれた農民の角右衛門と武士の角右衛門の間の恩義、また養父と多助の間の恩義、命を救ってくれた炭屋の主人と多助の間の忠義といった義理＝「義」という観念が『鹽原多助一代記』の主題なのである。そのため、多助が抱える「家の再興」という課題は、実父への「孝」ではなく養父に対する「義」にあったと言える。

### 3-2. 当時の評価

当時、『鹽原多助一代記』の塩原は経済家と評価され、明治期の近代人としての片鱗に読み手は注目したのである。[32]例えば、明治 25 年 1 月『鹽原多助一代

記』は歌舞伎化され、歌舞伎座で上演される。この舞台評で三木竹二[33]は「一番目は三遊亭圓朝丈が得意の読物、経済家塩原の伝記なり。平民主義の流行する時節柄にはまりし出しものとて大受なり。」[34]と紹介している。更に、多助が自分の経済論を語って聞かせる場面に触れ、「省略…この幕に到りて始めてその経済家たるべき本領を示すところゆゑ、気味好かりき。されば多助が大富限となりし根本もまたここにあり。」と書き、経済論ではなく馬との別れに焦点が当たりやすい点が惜しいと述べている。[35]

多助が披露した「経済論」とは、「稼いで來々々と金の尻つペタを打つと、痛いもんだからピヨコピヨコ出て往て稼いで歸り、疲かれたからどうぞ置いておくんなさいと云つても、…省略…稼いで來う。と云うつて又 尻 ペタを打つ…省略…仕舞には金が疲れて最う働けねへからどうか置いておくんなさい。最う何處へも往きません。…省略…これが眞實に天然自然に貯る金と云ふものだアヨ。」[36]というように、近代的な資本の蓄積・流通・循環を重視する内容であった。このように圓朝の『鹽原多助一代記』は、「義」や封建的身分制度といった前近代的なエートスが強調される一方で、近代を特徴づける資本主義経済的側面を内包した作品であった。その上、塩原は、商売の工夫と金（資本）が金を産むという自身の経済論によって身を立て、出世した成功者である。圓朝がこの作品を執筆した明治 9 年から明治 11 年とは、先に論じた「学制序文（被仰出書）」や『学問のすゝめ』によって〈立身出世〉というスローガンが打ち出され、急激な西洋近代化が進展していった時期でもある。速記本が 12 万部の売れ行きを示したのも、塩原の〈立身出世〉談が観客に受け入れられたからだと言えよう。更に言えば、ノーマンが指摘したように封建社会で武士階級にあった人々は、明治の新しい社会的変革に適応して小商人、資本家、農民、産業労働者など武士以外のものに転身しなければならず生計の途を奪われた。[37]塩原が武士から農民に身を落とす筋はこうした現実的状況とも合致し、元武士層からも受け入れられたと考えられる。

明治 25 年 1 月 13 日付『読売新聞』に 600 校の小学校に歌舞伎座上演の塩原多助の筋書が寄贈されたという記事が載り、三木も「歌舞伎座評判」の中で小学生が歌舞伎座に招待されたと記している。[38]このような過程を経て、『鹽原多助一代記』は修身教科書に採用された。言い換えれば、塩原多助の伝記は、観客[39]＝民衆側の人気によって広まり、その結果、当時の小学校修身教科書に採録された。二宮金次郎が明治政府即ち上からの意図により修身教科書に採用されたのに対し、塩原多助は講談という大衆的娯楽から生まれ、世間の評判を背景に下から修身教科書に取り込まれた。つまり修身教科書の基軸となった二宮に対し、塩原は下から上へと成り上がった修身教科書素材であった。この採用

過程に注目し、次の章では『鹽原多助一代記』がどのように変形されて小学校の修身教科書に取り込まれたのかという点について論じたい。

## 4．小学校修身教科書における〈労働〉倫理の表現：二宮と塩原の比較

〈労働〉とその背景にある道徳的規範との連関に注目するというヴェーバー[40]の視座に学びつつ、明治日本の小学校修身教科書に描かれた〈労働〉する子ども像が表現する〈労働〉倫理を分析したい。

現在までの調査の結果、塩原の話を採用している小学校修身教科書は合計 10 冊である。[41]児童用、教師用、また同じ教科書でも各学年の文章レベルに応じて書き換えられ繰り返し使用された。こうした事情から教科書の種類別に再分類すると合計 6 種の教科書に採用されている。

二宮と塩原は共に原典では大人として登場するのに対し、修身教科書では模範的な〈子ども〉として描かれ、家を離れ両親が不在で、〈労働〉に従事し、成功をおさめるという結末を有している。また、以下のように〈労働〉する子ども像として連関させて導入されることが多い。

> 先生が夜々勤労して、…省略…只管父を楽しましめんと務めたるは、孝子の心誠にさもあるべき事なり、
> （「第十一課 二宮尊徳先生（一）（孝行）」『尋常小学単級修身訓 教員用 甲編』金港堂、明治 33 年、53-54 頁。下線、筆者。）

> 前に二宮先生が堤防修繕の夫役に出でし事蹟を語り聞かせたり。如何なることなりしか、其の大要を語れ。此の絵を見よ、此は、昔に名高りし鹽原多助といふ炭商人の若き時、炭問屋に奉公して律儀に善く働ける様を、寫せるものなり。…省略…幼き時に、父を失ひ、それより様々の不幸に逢ひて、いたくおちぶれ、身の寄邊さへなくなりたり。
> （「第十七課 塩原多助（一）（誠実）」同書、83~84 頁。下線、筆者。）

しかし、テキストを特にプロット構成の面から詳細に分析すると様々な違いが明らかになる。二宮の場合、親を支えるという話が重要なプロットで、必ず両親または片親が生きている設定から始まる。引用したように、病気の父親や寡婦となった母を支える場合、家業を手伝うこと、酒代や不用の時に備えてささやかな貯蓄を行うことが模範的〈労働〉とされ、「孝行」が導入徳目になってい

る。それに対して、塩原の場合、親は死亡しているか、もしくは言及がない。つまり、二宮のように親孝行が重要な要素にはなっていない。こうしたことから、二宮と塩原を関連させて導入する場合、塩原も親孝行だという点を付け加えている教科書もある。

> 此の多助といふは、下野の國、鹽原の人にして、二宮先生の如く、家の貧困なる間に、よく親に孝行を盡しゝが、江戸に出でて、炭屋に奉公せり。
> （「第二十三課 塩原多助（一）」『新編修身教典 尋常小学校教師用 巻 2』普及舎、明治 36 年、68 頁。下線、筆者。）

次に、二宮と塩原は家を離れるのだが、ここでの違いは大きい。二宮は叔父の家に奉公し、農業など家内労働に従事する。一方で、塩原は江戸に出て炭屋の主人の下で奉公する。以下の教授上の注意は、両者が全く違う立場に置かれていることを認識している。

> 三、教授上の注意
> …省略…二宮先生の如き家事に追はれて勉學の餘暇なき人は、かくせざれば志を果すこと出来ざる故、實は止むを得ず爲すことなり。
> （「第二十一　二宮尊徳先生（二）」『尋常修身教科書 教師用 全』樋口勘次郎／野田瀧三郎著、金港堂、明治 34 年、第三學年 39-40 頁。下線、筆者。）

> 三、教授上の注意
> 主家にありては私の心を去りてよく働くべきこと。
> （「第十一　鹽原多助（一）」同書、第三學年、19 頁。下線、筆者。）

更に〈農村〉にとどまる二宮と江戸＝東京〈都市〉に出て身を立てる塩原は、全く違う〈労働〉環境にいる。塩原は、故郷を離れ東京に出て働く〈立身出世〉を体現している。また模範的〈労働〉の内容も異なる。二宮の場合の模範的〈労働〉とは、農業や家内労働と学問を両立させることであり、〈労働〉の背景には身内への孝行と、家業の優先という倫理観が見て取れる。塩原の場合、奉公先への忠義、無給金の労働、年季奉公の終了などが描かれ、〈労働〉倫理として主人―奉公人関係における「義」が強調されている。そして結末の「成功」姿も異なる。二宮の場合、実家に戻り朽ちた家を修理し「家」を再興する、つまり農村における成功であるのに対し、塩原の場合は都市に自分の店を開き、財を成すことで成功としている。次の注意書きは、こうした違いを裏付けている。

（教授上の注意）勤勉・節儉は、既に、二宮先生の所にて諭したるも、彼と、是とは、自趣を異にし、殊に、是は、商業家の立身談なれば、之に寄せて、實業上の心得を諭すを要す。
（「第二十三課　塩原多助」『新編修身教典』前掲書、69 頁。下線、筆者。）

修身教育で教材化された「二宮金次郎」と「塩原多助」の話は表面的に非常によく似た構成を持ち、指導書で両者が意図的に連結させられているにもかかわらず、比較の結果〈労働〉内容とその背後にある〈労働〉倫理が全く異なることが分かる。つまり、二宮と塩原は〈労働〉倫理としてそれぞれ〈孝〉と〈立身出世〉という修身イデオロギーを押し出している。後に国定に採用される二宮は、「家」という観念をベースに自分の職業／家業（農作業とその副業）に励むことが「親孝行」になるという〈労働〉倫理を持つ。この〈孝〉は先述した「家族国家論」へと繋がっていく。更に、農作業以外の子どもの〈労働〉として学問も追加され、家業に影響がないよう夜に学問をするという二宮の模範的〈労働〉は、農村にも〈学校〉を普及させようとした明治政府側の意図をも取り込んでいる。このように二宮が表現した〈孝〉や学問と、臣民が憧れた塩原の〈立身出世〉というエートスの間に大きな齟齬が生じていたのである。

## おわりに

二宮は明治政府によってトップ・ダウン的にイデオロギー構築された〈労働〉する子どもの模範的人物像として修身教科書に採用され、国定教科書に向けて意図的に変形されていった。つまり、明治政府は国民の大半が農民であった時代に国民を教育する修身教科書に二宮を使用することで、教育を受ける側の子どもが置かれている状況により近い模範的人物を作り上げようとしたと言える。一方で『鹽原多助一代記』の塩原は明治の大衆が憧れた〈立身出世〉像であり、忠義に堅く財を成した経済家として評価された。こうした人気により塩原はボトム・アップ的に一度は修身教科書へと押し上げられたが、「イデオロギー的なてこ入れ」装置としての二宮の力は強く、塩原は二宮と似たプロットへと刈り込まれ、結局は国定から排除されたのである。

## 注

[1] 海後宗臣・仲新編纂『日本教科書大系』講談社、昭和 37 年、612 頁。
[2] 本稿の〈労働〉倫理とは子どもの労働を推奨する契機となり、修身教科書において模範人物が体現している規範を指す。
[3] 1 大学区を 32 中学区に、1 中学区を 210 小学区に分けた。1 小学区に小学校 1 校を置き、全国に 5 万 3760 の小学校を設けるとした。（文部省『学制百年史（資料編）』帝国地方行政学会、昭和 47 年、12 頁。）
[4] 海後宗臣・仲新編纂、前掲書、604 頁。
[5] 同書、612 頁。
[6] E. H. ノーマン『日本における近代国家の成立』大窪愿二訳、岩波書店、1993 年、79 頁。
[7] 以下、主な年の小学校就学率である。
明治 6 年 28.1%(男 39.9%・女 15.1%)、明治 15 年 50.7%(男 67.0%・女 33.0%)、明治 16 年 53.1%(男 69.3%・女 35.3%)、明治 18 年 49.6%(男 65.8%・女 32.1%)。明治 17 年以後の就学率が低下した原因は、経済的不況の深刻化と言われている。（文部省『学制百年史（記述編）』帝国地方行政学会、昭和 47 年、195~198 頁。）
[8] この大学とは「国学、漢学を中心とした教育機関を大学校と称し、これに三局を所属せしめ、三局を開成学校、兵学校、医学校」とした「四つの分科をもったもの」の総称である。（海後宗臣『日本教育小史』講談社学術文庫、昭和 53 年、129~130 頁。）
[9] 海後宗臣『日本教育小史』前掲書、135 頁。
[10] 同書、139 頁。
[11] 文部省『学制百年史（資料編）』帝国地方行政学会、昭和 47 年、11 頁。
[12] ただし、実際には明治 10 年代は学校の設置、就学率を上げる事が先決の課題で、教員や教科書も不足していた。
[13] 初編から 17 編。明治 13 年、「合本學問之勸序」を加え一冊の本とした。この前書きには、初版以来、合計約 70 万冊売れたと書かれている（福沢諭吉『学問のすゝめ』岩波文庫、1942 年、9 頁。）
[14] 井上清（『日本の歴史 20 明治維新』中央公論新社、1974 年、291 頁）や海後（前掲書『日本教育小史』79 頁）も指摘。
[15] 文部省、前掲書（資料編）、7 頁。
[16] 神島二郎『近代日本の精神構造』岩波書店、1961 年、255~258 頁、314 頁。
[17] 唐沢富太郎『教科書から見た世界の教育Ⅱ 世界の理想的人間像』中央公論社、昭和 38 年、1210~1211 頁。唐沢の調査によると、5 回の国定教科書に登場する主要な人物は、国定修身教科書 142 人、国語教科書：185 人である。国定修身教科書では、明治天皇、二宮金次郎の他に、上杉鷹山、渡辺登、加藤清正、フランクリン、豊臣秀吉、貝原益軒などが採用されている。ただし、これらは国定修身教科書のデータであり、本論が研究対象とした国定前のデータで

はない。つまり、国定前の明治前期、明治 20 年代から 30 年代は、それまでの徳目主義に対して人物主義等が台頭してくる時期で、様々な要素が混在しており、それらが次第に国定教科書へと収斂していく移行期である。それはまさに、修身教育イデオロギーの形成期でもあり、明治 23 年の「教育勅語」によって修身教育の基軸が定められた後も、国定へ向けては教育素材に関して様々な立場と試行錯誤の試みがあったと考えられる。この点を、子どもの〈労働〉倫理の形成・確立をめぐって明らかにすることが本論の目的であり、国定前の未整理状態である修身教科書群を調査し、今回は「二宮金次郎」と「塩原多助」の比較を一事例として採り上げた。分析に際しては、マックス・ヴェーバーを参照しつつ、子どもの〈労働〉を称揚する背景に潜む道徳的規範に注目したが、この手法に関しては、拙稿：春季研究会推薦論文「修身教育の素材としてのグリム童話―ヘルバルト学派と樋口勘次郎―」(『国際教育』16 号、日本国際教育学会、2010 年 9 月）を参照されたい。

18 幾多伸司「戦後小学校国語教科書における二宮金次郎像についての考察―戦後国語教科書における理想的人間像の検討―」『広島大学大学院教育学研究科紀要　第 2 部(文化教育開発関連領域)第 54 号』広島大学大学院教育学研究科、2005 年。

19 中村紀久二『教科書の社会史―明治維新から敗戦まで―』岩波新書、1992 年（二宮についての言及は、195~203 頁）。

20 同書、197 頁。

21 中村紀久二、前掲書、199 頁。

22 同上。

23 富田高慶述『報徳記』岩波文庫、1933 年、4 頁、251 頁。八木繁樹『報徳運動 100 年のあゆみ』龍渓書舎、昭和 55 年、1142 頁。

24 現在の二宮尊徳研究は、実際の二宮が一種の脱税行為で農村を復興したという反政府主義者の一面も指摘している。

25 神島二郎、前掲書、49 頁。

26 同書、119~122 頁。

27 中村、前掲書、199 頁。

28 三遊亭圓朝演述/若林玵蔵筆記『圓朝叢談　鹽原多助一代記』速記法研究会、明治 18 年（三遊亭圓朝『三遊亭圓朝集　明治文学全集 10』筑摩書房、昭和 40 年、410 頁）。

29三遊亭圓朝、前掲書、408 頁。

30 同書、410 頁、417 頁。

31 同書、138 頁。

32 越智治雄も『鹽原多助一代記』に近代人の要素が見られると指摘（「もう一人の塩原多助」『近代文学成立期の研究』岩波書店、1984 年、59 頁）。これを受け、宮信明は歌舞伎を考察した（「三遊亭円朝『塩原多助後日譚』論―二極化する享受を前にして―」『日本文学論叢　第九号』立教大学大学院文学研究科日本文学専攻、2009 年)。教科書テキストや国民教育との連関は本研究独自の言

及である。

33 三木竹二(1867~1908)：本名は森篤次郎（とくじろう）、実兄は森鴎外。

34 三木竹二著/渡辺保編『観劇偶評』岩波書店、2004 年、133 頁。

35 同書、150 頁。

36 三遊亭圓朝、前掲書、159 頁。

37 H. ノーマン、前掲書、135-136 頁。

38 宮信明、前掲論文、171 頁。

39 落語、本、歌舞伎といった媒体は〈都市〉と深く関連したもので、ここで言う民衆とは主に〈都市〉であったといえるだろう。こうした点から〈都市民〉と〈農民〉の間にズレが生じていたと考えられる。この問題は稿を改めて論じたい。

40 マックス・ヴェーバー著/大塚久雄訳『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』岩波文庫、1989 年。

41『尋常小学修身』巻 1、重野安繹編、八尾書店、明 25／『尋常小学修身訓』巻 2、大和田建樹編、有正館、明 25 (三遊亭圓朝、前掲書、418 頁。詳細は、現在調査中)。

『尋常小学単級修身訓』(教員用:甲編第 1 冊、児童用:甲編巻 1、巻 2、巻 3)、金港堂編輯所編、金港堂、明 33／『修身教本 尋常小学校 児童用』巻 3、小山左文二・古山栄三郎編、普及舎、明 34／『尋常修身教科書 教員用 全』第 3 学年、樋口勘次郎・野田瀧三郎合著、金港堂、明 34／『新編修身教典 教員用』(尋常小学校教員用:巻 2、尋常小学校教師用:巻 2)普及舎編輯所編、普及舎、明 36。